

優秀賞

久留里線の車しゅうさん

東京都千代田区立麹町小学校六年 岡部 達美

私は、今年の三月、千葉にある三石山というお寺に行きました。朝早く起きて、地下鉄に乗り、東京から、総武線、内房線と乗り継ぎ、さらに、木更津から終点の亀山まで、久留里線に乗りました。片道三時間半かけての、とても長い旅でした。久留里線では電車の窓からは、もう満開になっている桜の花がたくさん、並んで見えました。私はその時、「もう、ここまで、春は、来ているんだなあ」と思いながら、電車に乗っていました。私は、お父さんに、

「もう、桜の季節だね。」

と、言いました。

「うん、桜の花が、まだ三月なのに、満開になっているね。」

と、お父さんは、ほほえみながら答えました。

「遠い山には、山桜かしら。かすみがかかったみたい。きれいだわ。」

と、お母さんは、うっとりしながら言いました。

「桜といえば、道明寺、食べたくなったね。」

と、お兄さんが言い、みんな、大笑いしました。そんな時です。

私は、電車の中で、車しゅうさんの動きが目に入りました。武田さんという若い車しゅうさんでした。武田さんは、乗客に向かって、しゃがんで話しかけています。

お年寄りが、尋ねました。

「亀山に、いつ着くのかな。」

「十二時です。」

と、大きな声で、ひざを折ったままゆっくりと答えていました。

「ありがとうございます。」

「お気をつけて。電車が止まってから、おりてください。」

私は、うれしくなっていました。隣りを見ると、お父さんも大きくうなずいています。お兄

さんが、言いました。

「すごい車しゅうさんだね。お客さんというよりも、心配して、自分のおばあさんに話しているみたいだよ。」

「そうね。心がこもっているね。お年寄りを見たら、すつとそばに行つて、ゆっくり話すの。」

と、お母さんも感心しています。

「ほら、あそここの泣いている子どもたちのところに、もう、車しゅうさんは行っている。しゃがんで、子どもを、あやしているよ。」

と、私。とにかく、すごい車しゅうさんと、家族中で感心しました。

片道三時間半の乗り継ぎ、乗り継ぎの旅は、長いものです。しかし、その日は、違いました。久留里線に武田さんというすてきな車しゅうさんがいたからです。困っているお年寄りや泣いている子どもそばに、すぐ行き、しっかり最後まで、話を聞いてあげている姿は、みごとでした。

その後、私は、周りの人のことが気になるようになり、私。そして、泣いている子どもや困っているお年寄りを見かけると、助けるようになりました。私は、これも、久留里線の武田さんの影響かなと思っています。

